

学位論文題名

ティリッヒの宗教思想における芸術の問題

学位論文内容の要旨

本論文は、20世紀を代表する神学者・宗教哲学者であるパウル・ティリッヒの宗教思想を、特に彼自身の芸術理解の側面から分析していくものである。ティリッヒは自らの宗教思想の形成と発展に、様々な視覚芸術の印象が重要な影響を与えたことを自覚していたため、芸術論の考察は彼の宗教理解の新たな解釈と可能性を探っていく糸口として有効だと考えられる。

ティリッヒは若い頃から視覚芸術を好み、大学教員になってからも絵画や建築に関する多くの論文やエッセーを残した。ティリッヒが特に注目したのは当時の新しい芸術運動であった表現主義であり、彼は表現主義という様式に自らの宗教思想を重ね合わせる形で芸術論を展開していったのである。第一章ではそうした彼の生涯における芸術との出会いや関わりについて、伝記的な事柄が整理される。

第二章ではティリッヒの芸術理解の具体的な内容がまとめられる。彼の芸術論の中心的問題は、基本的には、どのような芸術が「宗教的」であるか、というものである。ティリッヒは約90人にもものぼる画家とその作品を例に出しながら、伝統的な宗教的象徴を用いた芸術でも非宗教的なものはありうるし、また逆に世俗的なものを題材とした作品でも宗教的でありうるという見方を示す。彼は一部のいわゆる「宗教画」を非宗教的であるとして辛辣に批判すると共に、当時の表現主義の世俗的な諸作品を「宗教的」であるとして高く評価するのである。ティリッヒにとって芸術は、宗教的題材のものであれ世俗的題材のものであれ、「究極的な意味と存在の経験が表現されている限り宗教的」なのであり、「表現主義的」ないし「表現的」な芸術に、真の宗教芸術の可能性が託される。

第三章の課題は、そうした芸術理解の神学的・宗教哲学的根拠についての分析である。ティリッヒの宗教思想の思惟の枠組みは、大きく「意味の形而上学」と「存在論的人間学」とに分けられる。前者の枠組みから分析すると、彼は表現主義芸術を、世俗的形式が宗教的内実で満たされた「神律的文化」の具現として捉えていたと解釈することができる。また後者の枠組みから分析すると、表現主義芸術は、有限な存在としての自己を誠実に直視することで発せられる実存的「問い」として、また実存的窮境を「存在への勇氣」をもちながら創造的に表現したものとして、捉えられていたのだと解釈することができる。ティリッヒによる宗教芸術のあり方についての考えは、神学や宗教哲学の議論における思惟の枠組みに合わせて、人間や宗教や文化に関する意味の客観的構造という側面と、意味の主体的了解という側面との、少なくとも二つの角度からその思想的根拠を整理することができる。

第四章ではティリッヒの教会建築論が扱われる。彼は「空間」というものを実存主義的観点から考察した上で、建築の役割を、われわれ人間が無防備なままで投げ出されている無限

の空間からわれわれを庇護すると同時に、無限な空間へ前進していくことができるような有限の空間を創造することであるとする。そして教会建築においてもやはり伝統的な宗教的象徴を無理に用いることは批判され、むしろ現代においてはそうした象徴を用いないことによって生じる「聖なる空虚」こそが、教会建築の妥当なあり方であるとされるのである。

第五章でとりあげられるのは、『組織神学』において見られるキリスト論と表現主義芸術理解との連関である。ティリッヒによれば、キリストとしてのイエスは実存的疎外の中にある人間を再生する「新しい存在」として捉えられ、信仰は史的蓋然性によってではなく、「新しい存在のもつ変革力」にのみ基礎づけられねばならない。そして彼は、イエスという人物の理解の仕方において絵画表現を例に出し、自然主義的イエス理解と理想主義的イエス理解に対する表現主義的なイエス理解を提示する。彼のキリスト論の内容と性格は、芸術論における表現主義に対する考えを念頭に理解し特徴づけることができるのである。

第六章では、ティリッヒが芸術を「愛」、特に「エロース」との関連から議論している点について見ていく。彼によれば、アガペーは「愛の基準」とされるが、それでもアガペーとエロースの両者は不可分のものであり、二つは相関的な関係に置かれてはじめて意味を持つとされる。「究極的関心」の表現としての芸術は、それ自体が真理を求めての運動である以上エロースによって支えられているといえるが、同時にその芸術表現が宗教的次元に触れるものでもあるならば、アガペーの延長線上に位置づけられる。真の芸術的創造には、そこでアガペーとエロースの統一としての愛があるとされるのである。

第七章では、美学者ヴォリンガーによって議論された芸術とその宗教性の問題について分析される。ヴォリンガーもティリッヒのように、芸術の歴史には宗教の歴史と重なりうる精神的意義があると考え、また 20 世紀初頭の表現主義芸術にはある種の「宗教性」があるのだとした。しかしヴォリンガーの議論を詳細に検討していくと、彼は表現主義を含め芸術の諸様式を相対的に整理し捉えている一方で、表現主義を特徴づける「宗教性」という概念の意味自体は結局空虚なままであったことが明らかとなる。それに対してティリッヒは「宗教性」の意味を詳細に議論することによって表現主義の内実を説明できてはいたが、しかし表現主義を芸術全体の諸様式の中で相対的に捉えているとは言い難かった。こうしたところに、ティリッヒとヴォリンガーそれぞれの長所と短所を指摘することができる。

第八章での関心は、ティリッヒの宗教芸術理解における批判的な側面の妥当性についてである。彼は「非宗教的」と見なす芸術作品を「キッチュ」という言葉で呼ぶが、キッチュの概念については美学的にその妥当性が疑問視されている。ティリッヒによる芸術の非宗教性についての判断は当然彼自身の宗教理解に基づくものだが、美学的なキッチュ擁護の議論を念頭におくと、彼が非宗教的だと批判する芸術も決して一方的に排斥されるべきではなく、それなりの「宗教性」を認める余地のあることが示唆される。

終章ではこれまでの全ての議論のまとめとして、宗教芸術論の分析をとおして指摘できる新たなティリッヒ解釈、および芸術論の具体的展開における諸問題が整理される。ティリッヒの芸術理解は彼自身の神学と宗教哲学に根拠をもっているが、逆にその神学や宗教哲学の性格を「表現主義的」という言葉で特徴づけることも不可能ではない。宗教理解のエッセンスがあらわれているともいえる一連の芸術論をとおして、あらためて、具体的な生活の場における、動的な運動としての「信仰」の意味が確認される。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宇都宮 輝 夫

副 査 教 授 北 村 清 彦

副 査 助教授 佐々木 啓

学 位 論 文 題 名

ティリッヒの宗教思想における芸術の問題

本論文の審査委員会は、平成 16 年 5 月 14 日に発足以後、通算 5 回の委員会を開催し、論文内容に関する討議を行うとともに口述審査を実施した。そこでなされた審査の要旨は以下の通りである。

ティリッヒの宗教思想は、神学と哲学、宗教と世俗文化、観念論とマルクス主義など、様々な領域の境界線上で展開された。それらの基本的なねらいは、伝統的なキリスト教と現代文化との対話を成立させ、その信仰を再構築することにある。議論は実に広範囲にわたる。本論文の特色は、そうした幅広いティリッヒの宗教思想を、彼自身の芸術理解を糸口にして分析していく点にある。ティリッヒをキリスト教思想史や哲学史のコンテクストで捉えることが重要であるのはいうまでもないが、芸術理解の問題から、宗教哲学的・神学的諸問題を再考する手法は、新しい解釈可能性と発見に導く斬新な試みだといえる。

ティリッヒが青年時代から視覚芸術に強い関心を抱いており、それが彼の宗教思想の形成と発展に大きな影響を与えたという事柄については、これまで十分には指摘されてこなかった。またプロテスタントの思想家が、自らの宗教思想と直接的に関連させる形で視覚芸術、特に絵画や建築について議論することも稀であるだろう。そうした状況からして、本論文でティリッヒの芸術論の具体的な内容が大変詳細に整理され、その全体像が明らかにされていることの意義は大きい。芸術に関するティリッヒの主張内容は必ずしも明快ではないが、そうした点についても可能な限り整合的に再構成されている。

ティリッヒが宗教思想的な連関で特に注目していたのは表現主義の美術であり、彼は表現主義のうちに、現在と未来とにおける「宗教芸術」の可能性を期待していた。本論文ではそうした宗教芸術論の内実がティリッヒの神学・宗教哲学の分析をとおして明らかにされている。ティリッヒの宗教論を見るうえではいくつかの切り口があるが、「宗教は文化の内実であり、文化は宗教の形式である」という基本的テーゼ、あるいは「哲学的問いと神学的答えとの相関の方法」という神学的原理や「存在への勇気」の理念など、様々な部分から芸術論における「宗教性」の意味が解釈可能であることが明らかにされている。またティリッヒの主著『組織神学』のキリスト論における表現主義的なイエス理解についての考察や、「愛」の概念と芸術理解との連関、他には芸術論の一環としての教会建築論の分析

も詳細になされており、そうした一連の考察はティリッヒの神学・宗教哲学の再考としても興味深い議論になっている。また、ティリッヒによって主張される表現主義の「宗教性」と美学的議論において指摘される芸術の「宗教性」との比較分析や、ティリッヒが「非宗教的」な芸術に対して用いる「キツチュ」という語の美学的検討なども積極的に試みられている。他の芸術思想との比較についてはさらに掘り下げるべき点もあるが、今までにない角度からのティリッヒ研究としてその意義は十分に認められる。

本論文には、ティリッヒの議論自体に見られる曖昧さとは別に、美学・美術史固有の観点からは十分とはいえない検討や事実認識も若干見られる。だがティリッヒはあくまで神学者・宗教哲学者である以上、彼の宗教思想についての研究である本論文は、独自の視点から新たなティリッヒ解釈を提示したものとして高く評価することができる。またこうした本論文の性格は、キリスト教思想以外の研究者にもティリッヒという思想家に対する関心を喚起することに大きく貢献すると思われる。

本委員会は、十分に審議をつくした結果、以上のような評価に基づき、全員一致にて、本論文の著者、石川明人氏に博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。